

# 2016年度第3回SGH運営指導委員会

日時：2017年2月23日（木）16:40～17:35

会場：同窓会館会議室

参加者：

＜運営指導委員＞ 梶田叡一 奈良学園大学学長・米田伸次 日本ユネスコ協会連盟理事  
・朝野富三 宝塚大学特任教授

＜関西創価高校＞ 中西校長・梶田副校長・千葉総合寮長・池田SGH副委員長、福田SGH副委員長

＜管理機関代表＞ 狩野俊一創価教育センター参事

＜運営指導委員よりいただいたご助言・ご指導の要旨＞

○小中高の一貫教育なので、自己完結型になってしまっている面がある。純粹性・価値観を共有する良い面もあるが、多様な価値観との出会い、SGHの取り組みの足腰を鍛える、教育の身体性という意味では、地域との交流が大切であると思う。生徒自身が、場合によっては教職員も地域での実践活動や実地の体験をしていくことも考えられたらよいと思う。

○SGHの取り組みを通し、またSGH指定期間後にも通用する世界市民プログラムを開発し継続・発展させていく上で、教職員の負担軽減も考え教科学習との融合をそろそろ具体的に考えていくことが必要であると思う。

○他のSGH校の取り組みのいいところを取り入れてはどうか。運営指導委員会でも可能な範囲でいくつかの事例の報告をしてほしい。

○高校の新指導要領の原案はまだ発表されていないが、審議のまとめと答申が既に出ており、大体の輪郭がわかっているので、先取りして準備を始めてかれてもいいかもしれない。

○関西創価高校はユネスコスクールに申請されている。申請書の内容も素晴らしい。仙台のある高校はユネスコスクールでSGH校でもあるが、SGHの取り組みを進めていく上で、ユネスコスクールの活動の経験が大変参考になっているとのこと。関西創価高校もユネスコスクールとして、学びのネットワークを広げ、大阪・全国をリードしてほしいと強く希望している。

○あるSGH校は文科省からGood Practiceとの評価を得た。そのポイントは①育てる人間像を明確にしている。②成果を定量的に測定している。③成果を全校的（教員・生徒ともに）に共有している。この3点があったからだと思う。関西創価高校では、子どもたちが生き生きと主体的に学んでいる。生徒と先生が全校的にSGHをきちんと受けとめて全校上げてやっている、この点が素晴らしい。このような学校を作りたいとの明確な目的があり、それをクリアーにしている。育てたい人間像を明確にもっている。この点は、全SGH校の中でもトップクラスであると思う。きちんとしたプログラムとそれを進める方向・方法論が明確になっており、学校全体で共有されていると改めて実感した。

○（1年目まとめの報告書から）注目したのはアンケートだった。子どもたちが自らどう変容したかをもっと明確にするとよい。私をこのように変えたものは何かについて、生徒一人一人が自分の学びを問い返してみることができるようなもっと突っ込んだ質問をしてはどうだろう。成果をしっかりと測定することができるようになる。素晴らしい実践なのだから、実践のプロセスとともに、「どう変わったか」「どう変容したか」「生徒達が自分自身でどう受け止めたか」について捉えるところを増やすとよいと思う。次年度は、地域の学びとともに、この点を重点的に実践されたいかがか。

○学校での知識の学びだけではなく、地域の学びが大切である。子どもたち一人一人がいろいろな人との出会い、自己の生き方を見つめなおしながら、自己の生き方を考えていくプロセスがこれから大切であると思う。

○日本の教育には、2つの大きな流れがある。1つはグローバル人材の育成である。社会が大きく変化してきた、それに対応する人材づくり。もう1つ、ESDで目指す新しい未来の社会を創造していく人間づくりである。この2つ目の点についてもさらに取り組んでいただきたい。

○研究発表会の会場を出たところで、ある女子生徒と話しをした。その子は千玄室さんと会ったことがあり、ニューヨークの国連本部にも行ったと話していた。とても前向きで積極的だった。このような生徒が育っていることが素晴らしいと実感した。是非、仙台にも行ってみたい。仙台二華高校やウルスラ英智高校、また宮城教育大学にも。全く違うところを訪問することは勉強になると思う。

○とても素直でよい子も、世の中に出て行ったときにリーダーシップをとれるか。将棋の駒ではなく指し手になるということが大切と思う。英語ができるとか理数系の力があるというだけでは、有能な駒になるだけである。主体性が必要である。関西創価高校のGRITは、まさに指し手を育てる教育だと思う。主体的というのは、自分事として考えることができるということ。どこかから課題を与えられて、それが上手に解けるというだけでは、それは駒である。指導要領が謳っているのは、主体的対話的な深い学びである。

○対話的とは異質なものとどう触れるかということ。異質なものとでなければ対話にならない。正・反・合という思考様式が身につくかどうか大切。その意味で、地域とも交流し、自分たちが当たり前だと思っていることでも通じないことがあるなどの体験を通して、コミュニケーションの術を学んでいく。そうしていく中で、指し手になることができると思う。その延長と言う意味で、創価大学だけではなく、地元の大学と高大連携してみてもどうか。そうすると、いろいろな先生とつきあうチャンスも増える。上手に目配りしながら異質なものと触れ合いをさせていくことが大事である。今日は地元の交野から教育長が来られていたのも良かったと思う。

○（Feel Japan Programについて）日本のいい言葉は暗唱させるべきである。情緒的でもあるが、論理的でもある。古文は、対比を上手に使って論理を積み上げていくという構成になっている。中学・高校の時にそのようないい文章に触れさせることは、すべて財産になる。言葉は思考の元になる。新指導要領でも語彙力が強調されている。日本語はとてもきめ細やかな言葉遣いがあり、いろいろな言い方がある。その意味で語彙力があると、英語でも様々な表現ができるようになる。

○これまでは、位置づけのアイデンティティ、男だからとか女だからとか先生だからとか、つまり外側から見られたイメージの中で自分を整えてきた。しかし、これからは、私はこれでいくという宣言としてのアイデンティティが大切である。もっと言えば、私はこのような人になりたいという志のアイデンティティが大切である。もちろん、位置づけのアイデンティティも必要であるが、それを乗り越えて、志のアイデンティティを打ち出していけるようにすべきであると思う。しかし、それは、精神的なバックボーンがある学校でないとなかなか押し出せないと思う。関西創価高校の SGH プログラムを通し、ぜひ「志のアイデンティティ」を伸ばしてもらいたい。

○関西創価高校の良いところは、創立者の言葉がよく出てくることである。建学の理念、バックボーンをこれからも大切にしてほしい。3年目の挑戦に期待している。